

大通 和座 信

YAMATOZA

日々新面目

其の十三

安東伸元

昨年、私の手元に「狂言画写」と題箋の貼られた絵巻物が一卷届けられた。墨の線描で和泉流

狂言二十六曲の登場人物が描かれている旧鴻山文庫の古書である。この珍品を元、羽衣学園短期大学教授の中野眞作先生が入手され、未公開の作品である事から刊行をというお考えが生まれた。出版物の内容は、巻物の「書誌解説と絵図の影印」の主軸に加えて、描かれた狂言曲目のあらずし解説、狂言装束の服飾的構成解説、装束の着付け分解写真及び解説という内容である。装束の構成作図と解説は中野先生の夫人である慎子先生が執筆された。慎子先生は相愛女子短期大学の被服科教授であり私と同様今年度定年の節をお迎えになるので、この出版には退官記念と言う意味も含まれる。数年来取り組まれてきた狂言装

束の構成研究論考を公開されるわけである。「狂言画写」中の登場人物を分類整理して、それぞれの装束を私が所蔵する現物に即して詳細に採寸し、縫製技法と構成を綿密に図示して解説された労作は正に希有にして貴重な資料になるはずである。中野先生

が私に促されたのは曲目解説の執筆と、装束の着付け及び着付け分解写真の制作と解説作文であった。二十六番の狂言台本を大蔵・和泉の両流にわたって精読する事に相当な時間を費やしたが、これは両流の趣の違いなどを改めて識るといふ興味をそられると同時に勉強になった。夏から晩秋にかけて締め切りの日程と睨み合いながらの執筆作業は、およそ物書きを生業とする人の苦しさをちよっぴり味わう様な気のものであった。それよりも得難い試練の体験になったのは百枚に及ぶ装束着付けの組写真制作作業であった。千里山稽古場の壁面に幕を張り、六力所から強力な照明を当てて行う撮影作業は、モデル役はもちろんのこと撮影者・着付け要員など大和座のスタッフ全員に心身共の労苦を強いものになったが、各装束の意味を悟り着付け技法の練習という点では多大な収穫を得る数日となった事は確かである。労苦の理由は、これを真夏に強行したからである。金久君は照射熱に耐え後半に及んでは意識朦朧に近い状態を克服しながら着せ替え人形役を

果たした。自他共に認める大汗かきの小田君は、紋服の正装で文字通り滝の如き汗をしたたらせながら着付け作業に奮戦した。中にも撮影を担当した井上君は、悠悠迫らぬ緻密さで数台のカメラを駆使してシャッターを押し続け、周りに意外性を又一つ印象付けた。素人離れと評しても良い写真の出来映えは、是非本書をお取り上げ下さつてご見分いただきたいと乞い願う。一月

の初旬に初校を終えて一段落。今春四月に和泉書院から出版される予定である。この本作りは中野眞作先生から頂戴したものであるが、最終的には夫人の慎子先生と私の共著という体裁にしたいとご連絡があり、私は今大いに恐縮している。昨年のおんどをこの本作りに没頭してきて形の見えかけてきた今、私の胸中に一つの感慨が芽生え始めている。その事をお話申し上げたいと思う。すでにこの通信で度々述べてきた内容であるかも知れず、もし重複の失礼があればお許し願いたい。話の発端は私の幼少時に遡る。私の父は観世流能楽師であったので幼少時から私を取り巻く生活の中に謡曲と稽古人の姿が絶えず存在していた。小学生の私が「海土」のキリ謡を諳んじ正に確に謡って周囲の大人達を驚かしたり感心させたりしている時もあった。従って自分が望めば、父に続いて能楽の道を目指す事には何の支障もないはずであった。ところ

が成長と共に何故かこの道への参入を強力に忌避する直感が増幅していつて、将来への展望を考えださなくてはならぬ青年期に至つてもなお無頼に近い放縦な生活に明け暮れていた。父はそのような私に能楽師への道を勧めも強要もしなかった。そこが前途ある我が子を無理に押し込める場所ではないという認識と、私の直感を是認する気持ちで働いていたのだらうと思う。やがてその中で、これまで距離を置いて鑑賞を続けてきた狂言に素朴な興味を覚え、十九歳の春一稽古人になった。内向型の性情を演劇的な刺激で好転させたいという気持ちもあつた。能と狂言は元々同根の兄弟芸能であるから、幼少年期の環境や体験によつてもたらされた下地が目にと留まつたのか、数年後師から能楽協会への入会を勧められ一応の狂言方能楽師という身分を得た。しかしこの間もこれ以後も、日々の生活はテキスタイルデザイナー稼業で維持していた。このようにして能楽界と関わる有為転変の人生が始まり決着のつかぬ煩悶を抱えたまま今日に到っている。芸道への勤仕と、所属する流儀や家への奉仕という二つの精神が噛み合わぬ不審を解消できず悩みを抱えて辛吟していた四十八才の時、羽衣学園短期大学学長であつた故、吉永孝雄先生から救いのお言葉を頂戴した。「狂言界にあつて、もうこれ以上の展開は望めないだらう

から、教育の現場で体験を活かす事を考えるとはどうか」この示唆によつて教員生活が始まり、年を追つて出講する大学の数が増えた。もとより二セモノ教師に過ぎない私を現場で支え、数々ご教導くださったのが中野眞作先生である。その先生から私学定年七十才に満ずる年に「狂言画写」の卷子一本を与えられ、執筆を促された事に不思議な因縁を感じ、去来する感慨を覚えているのである。羽衣学園短期大学に職を得たのは一九八三年、かねてから私の去就を心配してくださっていた或る方は「捨てる神があれば、また拾う神もあるのですね」と告げられた。亡父の遺品、又は亡夫の所蔵したのですがどうぞお使い、と言つて面・装束を私に与えて下さつた方が数人。腰帯や頭巾類など暇に飽かして手作りしてきた小道具の数々。自前の稽古場とNHK文化センター狂言講座での稽古人を得て年一回の狂言会を開催し続けること二十三年、その都度調達する事の出来た新しい面・装束。二十年を経てやつと陣容の形が見えだしてきた大和座狂言事務所の同人や仲間たち……。実は今、それらの歴史の先に今回の本作りが待つていたという想いがするのである。言いかえれば二十数年の積み重ねの結果もたらされた果実が、この本にぎつしり詰まっているという事である。間もなく出来上がる書物の「あとがき」に本稿を

要約し、「中野先生へは、この機会をお与え下さつたご厚情に衷心より感謝し、また拙文を恥じつつこの本を故、吉永孝雄先生の霊に捧げたい」としめくつた。書誌学の所産である本書は、本編の他に現在舞台で使われる狂言装束の被服学的考究と着付けの技法を解説する連続分解写真資料を付録しているが故に、他に類を見ない出版物であると言える。能楽の面装束は出自が明らかで時代考証の対象物である事を条件に紹介される。例えば大名家所領の面装束、宗家や名家に伝わる将軍家より拝領の面装束といったものが価値あるものと説明されるのである。そしてその風様を持たぬ物は公表しても意味が無いとする考えが社会的に遍く定着している。であるから大抵の出版物は高級感を漂わせた学術書か美術書の体裁で作られ書架を飾るに格好のものになつている。この価値観が障壁になつて一般の研究者は簡単に手を出さず、その結果本書の類書が容易に見出せないと言えるのである。その意味で本書の刊行は画期的な事と言える。私がこの書物にかくもこだわり、想いを深くする理由をどうぞご理解いただきたい。

(艸言会の前日)



安東伸元（あんどうのぶもと）

一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会
会員、狂言方になる。「大和座狂言事務所」を
主宰。一九八〇年より教育機関への出講が始ま
り、現在、羽衣国際大学・羽衣学園短期大学客
員教授のほか、大阪芸術大学・大阪府立東住吉
高等学校の各非常勤講師。二〇〇一年、重要無
形文化財（能楽）保持者総合指定を受け、準じ
て『日本能楽会』会員。二〇〇二年二月、ポー
ランド国立クラクフ演劇大学に於いて二週間に
及ぶワークショップを行う。

「松風」

もろきゆう

北海道ルスツ高原ホテルのロビーの前には喫茶室があった。今年はその改装され、噴水になった。チャイコフスキーの「クルミ割り人形」のリズムに合わせて水が吹き出し、青・赤・黄色の様々な色のライトに照らし出されている。フロントの前を通る人々は思わずその華やかな噴水ショーに見とれて立ち止まる。いずれも、一様に「きれいな」と声を挙げていた。しかしフロントの前に半日近く座っている人には総じて不評である。「もう見飽きた。」というのだ。所詮、噴水のイルミネーションはじつくり味わったり、何度も見て楽しむものではないのだ。それは表面的な美しさであって、内面的な美しさではないからだ。私はそれをディズニー風の美しさではないかと思う。ディズニーランドの派手で明るく、にぎやかな仕掛けはまさにこのイルミネーションに通じるものだ。ディズニーランドは表面的な美しさを際立たせることにかけては実に巧みである。いずれも感覚を刺激するだけで良い。視覚的には目に鮮やか、原色に近い色合い、そして音響も騒音にならない程度に最大限大きくする。この音響効果と視覚効果のおかげで人々の足が止ま

る。そして噴水イルミネーションに感動し、きれいなホテルだという好印象を持って帰るのだ。それは巷の夜のネオンであり、ルミナリエのイルミネーションであり、クリスマスに各家庭に飾られるイルミネーションの美しさと相通ずる美意識といえる。そのような美意識は日本の現代社会のさまざまな面に影響している。女性が美しく飾ることには異論はないが、近年はエステサロンでの全身美容や、美容整形、男性向けのものまでが流行している。自分自身を美しくするというのは、決して爪を磨いたり、顔を磨いたり、耳に穴を開けたり、髪の毛を染めたりする事ばかりではない。男性であるうと女性であるうと内面を磨くことでその人独自の美しさを表現できるはずだ。しかし、現代社会では男も女も外見を磨くことに腐心しているのだ。

さて、兼好法師ではないが、ひねくれ者の私には外見を磨くだけの美意識は一向になじめない。昔の人々の美意識の方がほどなじみやすいように感じる。例えば、王朝時代に生きた人々の美意識をみると、『枕草子』の冒頭部分に「春は曙、やうやう白くなりゆく山際少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる」とあり、刻々と変化する自然の美しさに清少納言は感動している。自然はそういう意味合いで奥深い美しさを秘めている。自然の変化する姿

は決して一樣ではない。またその変化には様々な意味がありとても人知のおよぶものではない。昨年の年末、「かぎろひ」を見るために安騎野（奈良県宇陀郡大宇陀町）へ行ってきた。柿本人麻呂の「東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ」の「かぎろひ」を見るためだった。この歌は軽皇子が安騎野の獵場で狩りをする前日、人麻呂が献上したといわれている。深夜大阪を出立し、午前二時ごろから大宇陀町役場の裏手にある小高い丘に立った。日の出前に東の空がうつすらと明るくなり、空全体がかすかに揺らめくという一瞬をみるはずだった。しかし東の空は厚い雲に覆われ、ほのかな光さえなかった。ふと振り返ると、西の空に雲の合間から満月がくつきりと姿を現した。「月傾きぬ」だけを体験をしたひとときであった。

『徒然草』百三十五段では「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものか」という一般的な美意識に対抗する考えを述べている。普通の人は桜の花は満開の時に花見をし、月は雲一つない空に輝く月を見て「うつくしいなあ」と感嘆の声をあげるものだ。そこを、ひねくれものの兼好らしく、花は散ったあとでも良いではないか、雲がかかっている月も趣があるものだとして述べているのだ。この話について瀬戸内寂聴さんは「美意識こそが人間の向上心の根であり、文化の素である。美意識の度合いで人間の教養の質や品性までもはかれるのである、と兼好は本気でしんじこんでいたと見られる。」と『寂聴つれづれ草子』で述べている。そしてこの「花はさかりに・・・」の一文にこそ兼好の美意識が凝縮されているとするのである。「これを裏返すと、昔の人々は教養を身につけ内面を磨くことに努め、独特の美意識を獲得したともいえる。「ひねくれもの」とは言ったが、私はこの兼好の美意識に大いに共感を抱いている。さりながら、一方では自分自身の教養や品性の低さに辟易するものでもある。少しでも昔の文化人たちの教養の一端に触れたいと思うが、むなししい時間ばかりが過ぎて行くだけだ。それはさておき、中古・中世の社会では女性は和歌の才能、男性は漢詩文の教養が必要であった。時代を経るにつれてその教養の内容や享受された人々の階層に変化こそあれ、明治・大正・昭和初期ごろまではなにかしらの形で残っていた。室町期以降の教養のひとつに「能」がある。この稿では能「松風」を読むことで、人々が享受してきた教養の一片を垣間見ようと思う。

まず、「松風」の梗概はつぎのとおりである。「廻国修行の僧がある日、須磨浦で松風、村雨の海士（あま）の旧跡を通りかかり、念仏をして申った。その後、とある塩屋で一夜の宿を乞うた。宿主の二人の海士に行平の歌を口ずさみ、旧跡の松を申った旨を話すと、二人は泣く泣く自ら松風、村雨の霊であることを打ち明け、行平に寵愛せられた次第を語った。松風の霊は恋慕のあまり、行平の形見の烏帽子を被り、狩衣を着けて舞を舞い、回向を乞うた。夢は覚め、ただ松吹く風ばかりが残った。」そもそも二人の海士が愛した在原行平とは弘仁九年（八一八年）生まれ。在原業平の兄である。『伊勢物語』で多くの女性との恋の物語を紡いだ在原業平の兄ということがこの恋愛譚を生み出す基となっている。

この行平中納言については『古今和歌集』雑下に「田村の御時に、事に当たりて、津国の須磨と言ふ所に籠り侍けるに、宮のうち侍ける人に、遣はしける わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつ侘ぶとこたへよ」とある。これは文徳天皇の頃、在原行平が事件の罪を被って須磨に引き籠もっていたときの歌である。「たまたま聞く人があれば、藻を焼いて塩をとるといふ須磨の浦で、侘び暮らしていると答えてくださいよ。」という意味の歌だ。この歌を基にして次のような説話が作られたそうだった。

『撰集抄』巻八第十一である。「むかし行平の中納言と云人いまそかりける。身にあやまつ事侍りて、須磨の浦につつされて、もしほたれつつうらづたひなどしありき給ひけるに、繪島の浦にてかづきする海人の

中に、よに心のとまり侍りけるに、たどりよりにたまひて、『いづくに休みする人にか』とたづね給ふに、この海人とりあへず、白波のよするなぎさに世をすこす海人の子なれば宿もさだめずとよみてまぎれぬ。中納言、いとどかなしう覚えて、なみだもかきあへずとなん。」(後略)。

『古今和歌集』では「事にあたりて」とあり、『撰集抄』では「身にあやまつ事侍り」と言っているが、行平が事件に巻き込まれたか、自身の不祥事で左遷されたということは共通している。ただ、行平は「立ち別れいなばの山の峰に生ふるまつとし聞かば今帰り来む」と詠んでいて、須磨より遠い因幡へ赴任している。それよりは京に近いというものの、平安京に暮らす皇族にとつて文化の届かぬ須磨はやはり左遷の地であった。この話は行平が目にとめた海士に住まいを尋ねたが、「住まいは定まらず」という歌を詠んで行方をくらましてしまい、行平の恋しい想いは募るばかり、という話だ。こういう高貴な身分の者が辺境の地で暮らし、さまざまな出来事に遭遇したり、恋愛をしたりする話を貴種流離譚という。

『源氏物語』などにも影響を与えたこの貴種流離譚の典型的な形は高貴な身分の男と、身分の違う女性とが恋に陥る話である。こんな話をしているとある人が「海士だったら顔の色も真っ黒で、着ている物も粗末

な着物のはずだが、行平は何を規準にして好きになったんだ。」と私に尋ねた。当然の疑問だ。見初めたのは外見「みめ・かたち」かもしれない。しかし、ますます恋しくなったのはその女性が優れた歌を詠んだからである。『撰集抄』の話の結びには、「歌まことに優なり」とある。先ほどにも述べたが、王朝文化に暮らす文化人にとつて、歌の才能はもつとも重要な基準だった。(つづく)



山田 師久(やまだ もろひさ)

大阪生まれ。本名・山田茂。一九八六年より安東伸元に師事。中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務所の学術ブレーン。月例「輪讀会」の座長を務める。学問的指導の他、若いスタッフたちには人生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学校国語科教諭。

仲人の落とし扇 〜アドリブと作為〜

森五六九(もりごろく)

「仲人の落とし扇」という言葉がある。

結論をば滞りなく済ませ、その場を後にする仲人さんがその家の庭へさしてポンと扇子を落として帰るといふ習わし。「盈(満)つれば欠く」という言葉があるがまさにこの事。「広辞苑」によると、「月は満月になれば次には欠けていくように栄華の絶頂に達すれば次には衰える」とある。これ、先代桂春団治夫人より伺った。シカシ、何でも聞いておくものだ。数年ほど前、とある企業の周年パーティーで一席伺うついでにと式典の司会をば仰せつかった時のこと。謝辞、祝辞と続いていよいよ乾杯の段となつたその瞬間、壇上の一番目立つところに貼りつけてあった会社の社旗がハラリと落ちたのである。シーンとした場内。列席者のグツと息を飲む音がこだまするかのような状態。ほんにゲンの悪い。誰かが図つたかのようなシーンであった。ホテルの宴会担当責任者はじめ関係者が青ざめたのは言うまでもない。そんな時毎度のことであるが、何かハプニングがあると皆の視線はなぜか司会者である私に集まるのは決まっている。

「お前が何とかせんかい！」という無言の圧力。その時ふと思いついたのが、この「落とし扇」。私はただ淡々と申し上げた。「・・・ええ、只今は滞りなく式典を進めて参りました。ところで皆様は仲人の落とし扇という言葉をご存じでしょうか。」この言葉の意味を説明して最後に「つまり、只今のはこの仲人の落とし扇と心得ます」とすると、一番上席にいた御来賓の「こらエ！めでたいこつちや」という声に乗せられ会場割れんばかりの拍手が起こった。ずいぶん無理矢理であったが、何とか上手くはまってくれた。これまさしく自画自賛。司会の役というのは上手くいって当たり前目立ってもいかず、何かハプニングがあつてそれを処理してこそ評価が得られる部分がとても大きい。ただ道具の受け渡しのために存在するのではなく、舞台の上でもし役者に万一の事あればいつでも取って代ろうという「後見」のお役目の心意気に相通ずるかも知れない。この時、ギャラとは別に御祝儀を頂戴した。「ハプニングはおいしい」のである。

ところで、芸人の大先輩上岡龍太郎師のこんな言葉が印象に残っている。「芸人のアドリブの九割はアドリブやない。」言い回しはちょっと違ったかも知れないがつまりこういう事だ。いかにも芸人はその場その時にさも突然思いついたかのようにアド

リブを発して笑いをとる事が多いが、その大半はすでに予定されていたこと。もつと噛み砕いて言えば、色んな場面を想定してその状況にあつた言葉を常に用意しているのがプロの芸人。「広辞苑」によるとアドリブとは「映画・演劇などで、俳優が台本にないせりふを即興的にしゃべること」とあるが、この即興もただの思いつきではないという事が言いたいのだ。上岡師はこう付け加えている。「自分の中に色んなパターンの引き出しがあつて、その引き出しをその場の状況に応じて即座に適確に引っ張り出す能力。これがアドリブなんや。」だから、ぴたりとはまった「アドリブ」の喜びは、計画的犯罪が成功したその心理に近いものがある。

先の「仲人の落とし扇」に話を戻して告白すれば、これはまさに計画的犯罪者の心理。ハラリと社旗が落ちた瞬間、その場にいた大半がドキリとしたに違いない。しかし、その時私は内心しめたと思つた。ここであれを使つてみようと思つた。もし、あの時ハラリと落ちるよう自分自身の手でわざと何らかの細工を仕掛けていたなら、私はまさしく完璧な計画的犯罪者に成り得た。・・・何か使えそうなフレーズを耳にするとそこから夢想の世界へ入り込むというのが私の癖である。それは普段の会話であつたり本であつたりテレビラジオ、夢などきつ

かけは様々だが、「こんなシチュエーションでこんなことを言つたら面白いな・・・」と空想するのはいたつて至福のひとつである。家では嫁はんとの会話中、急に世界に入るので当初はずいぶん気色悪がられていた。「何やの、急に思い出し笑いして」ただひとこと名譽のために申し上げておくが、これは「思い出し笑い」ではない。「思い出す」とは、「広辞苑」によると「忘れたことを思いつく。前にあつた事を、今また思つ」とあるから、私のそれはそうじゃない。「思いつき笑い」。少なくとも過去ではなく、これからあるであろう、あるかも知れないことを思つて想像するのだから、極めてクリエイティブな行為である。

話は変わるが、師匠（桂春蝶）亡き後、落語の稽古を一番つけて下さつたのが兄弟子の昇蝶である。大和座の稽古場がまだ国分寺にあつた時分ですいぶん使わせてもらった。「蝶六、お前のは作為が見えるねん。」よく兄弟子に叱られた。芸をするという、そのこと自体「作為」だが、それを感じさせてはお客はついて来ない。咄をより聞いてもらつたため、笑いを取りにくいため、演者は技術的な作戦を実行するのであるが、この作戦という「作為」をお客に感じさせないことこそむづかしい。「広辞苑」によると「作為」とは「つくりなすこと。こしらえること」とある。「いかにも落語をやつ

てます」という落語口調、「いかにもこ
が笑うところです」「笑わせてやろう」とい
う「作為」が嫌味に感じられるとその芸は
ホント後味の悪いものになる。にも関わら
ずこれで場内が沸いている状態を幕内では
「悪ウケ」と呼んでいる。それを自身がやっ
ているとは何と恥ずかしいことか。以前
「ふるさときやらばん」というミュージカ
ル劇団に客演させて頂いた時には、演出家
に「台詞を言うんじゃないよ。」などと何
度もダメ出しをされた。「台本に台詞があ
るから言うんじゃない、その役になりきっ
ているお前の身体が反応して自然に言葉が
出るんだろ。」ここでも「作為」との戦い
だった。門弟の分際で言うのもおかしいが、
狂言を演じている時の安東は「狂言師」と
いう肩書きもさることながら「室町人」と
いう言い方が当てはまる。室町の人が自然
に存在する凄さ。芸を自然に見せることは
実にむづかしい。「アドリブ」が尊ばれる
のは、その場の空気に乗じ自然に出たとい
う「作為」性から離れている点だろう。し
かし、先に申し上げたように「アドリブ」
も計画的の一面を持っているから油断はな
らない。いずれにしろたとい芸が大仰であつ
てもいかに作為を感じさせないか計算を悟
られないかが問題だ。けれど、もつとも肝
心で難しいのは、何度同じことを言っても
きちんとお客に受け入れてもらえるかどう



森五六九（もり ごろく）

大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言
方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大
阪スクールオブミュージック専門学校、大阪
シナリオ学校の各非常勤講師の他、ECCアー
チストカレッジの落語教室及び大阪府立桃谷
高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ
「講座」も勤める。現代社会にあって、好ま
しい芸能人の在り方を模索中。

公演レポート

井上放雲

二 五年も、はや二月半ばとなりまし
た。大和座は今年もハードに舞台をこなし
ています。そのうちの、一月二十七日池田市
民文化会館で行われた池田ライオンズクラ
ブ主催「池田市立小・中学校狂言鑑賞会」
の様をレポートしてみようと思います。

ライオンズクラブは、皆さんご承知の通
り様々な形で社会奉仕を行っている国際的
な団体であり、今回主催された池田ライオ
ンズクラブは誕生から45年を迎えているた
いそう歴史のあるクラブです。今回は池田
市の小・中学生に本物の古典とふれあう機
会をプレゼントしたい、という趣旨で企画
が立ち上がり、大和座に声をかけて下さつ
たことで実現の運びとなりました。当日会
場には近隣の小・中学校6校から児童・生
徒が集まり、大ホール一六六の客席は満
杯となりました。

プログラムは、まずオープニング狂言と
して『蟹山伏』。配役は山伏・金久蒼汲、
強力・井上放雲、蟹の精・小田兆紀。続い
て安東師匠による「お話と演習」。今回
は『雪山』の謡いに重点を置きました。休
憩をはさんで狂言『附子』。主人・森五六
九、太郎冠者・安東伸元、次郎冠者・小田

兆紀という布陣。

『蟹山伏』は、理屈抜きで楽しめてしまう一目瞭然単純明快な演目です。修行を終えて旅をする山伏が大きな河のほとりで蟹の精と出会い、家来の強力が退治しようとするのと逆に耳を挟まれてしまふ。そこで山伏はお祈りをして強力を助けようとするけれども効き目がない。とうとう山伏も耳を挟まれてしまい、蟹は二人を打ち倒して行く。観客が大人の場合、演劇的にレベルの高くない上演でも古典というのはこういうものだ、と自分に思いこませて黙って観てくれることもあります。子供相手にはそれはいきません。我々舞台の側はそれこそ必死で、狂言の持つ舞台芸術としての演劇的な仕組みを、高いレベル目指して表現させなければ、皆そつぽを向いてしまふのです。おそらく台詞の意味などは、細かく理解していないでしょう。「大峰かけて葛城や〜」などと言われても、我々でもすぐにはピンと来ません。しかし山伏の装束・立ち姿・話し方・振る舞い、強力の腰の低い姿勢や口調から、二人の上下関係を読み取り、威張っていた者がズッコケることで生まれる面白さの仕組みを、本能的に理解していたのは明らかでした。客席の子供達は、まず山伏の威厳に驚き、蟹の登場に目を見張らせ、やがて山伏の威厳の失墜に声をあげて笑っているのです。実に恐ろしい観客

たちでした。こんな現場でこそ、私達も鍛えられていくのです。

「お話と演習」では、安東師匠が常々若い世代に伝えようとしているメッセージが、熱く語られました。私なりの言葉で要約してみます。「君たちが大人になるにつれ、古典的なものとの出会う機会が増えてくる。古典というものは人間の（心の）骨格になるものだ。今日ここで観たものや一緒に歌ったこと、力強く美しい日本語、装束の色合い、人間の立ち姿や動き（所作）の美しさ、力強さ、観ていて元気になる物語、心に突き刺さる様な歌の旋律等々」を、よく心に留めておいて欲しい。それを憶えておけば必ず役に立つ日が来るはずだ。」

舞台では、各学校から選ばれた十数名の代表の児童たちが、舞台から客席に向かって正座をし、『雪山』を大きな声で謡い、また狂言の台詞にも挑戦をします。狂言の所作を真似てもらっただけで、普通会場は爆笑の渦と化しますが、大和座では敢えて少し難しい『雪山』の歌唱に多くの時間を割きます。謡いにこそ、室町の時代のエッセンスが色濃く込められていると考えられるからです。

春ごとに、君を祝いて若菜摘む、

わが衣手に降る雪を、払わじ払わで

そのままに、受くる袖の雪

運び重ね雪山を、千代に降れと作らん

雪山を千代と作らん。

（私は春が来るたびに、大事に思う人達の幸せを祈って、野に出かけて新しく芽を出した草花を摘みます。土筆やよもぎ、ふきのとうなどを摘んでいると、まだすっかり暖かくなっていないので雪が降ってきて、着物に降りかかります。その雪を見て私は雪の山を作ろうと思いつきました。私にとって大事な人達の無事を願って、たくさん雪山をつくりましょう。だからどんどんもつとたくさん雪が降って欲しい。）

案の定、謡い終えて感想を訊ねると、「難しかった」「何を言っているのかわからない」「ゆっくりしていて謡いにくかった」といった否定的な意見が多く出ましたが、それはそうです。その難しさこそが、今の私達が失ってしまったおらかな時間感覚や美意識と直結しているのですから。だからこそ、ここで謡った『雪山』の旋律や歌の意味を、憶えていて欲しいと切に願います。

そして休憩の後に『附子』の上演です。この休憩というのが曲者で、子供達はいつもの調子を取り戻したのか、大ホール全体が休み時間の教室と化していました。演目と演者の紹介に金久君が出て行った時は、まだ蜂の巣をつついたような状態です。ところがいざ狂言が始まってしまうと、子供達は一気に物語の世界に戻ってきました。

『蟹山伏』に比べて、『附子』は少々小難しく理屈っぽい所があります。しかし、改めて子供向けにわかりやすく変更して上演するなどの小手先の手段は取らず、狂言の本来の姿そのままを出来るだけきっちりとして演じようとする姿勢は、結果的に直接子供達の感性に突き刺さるのだと、改めて実感する次第です。学級崩壊などが取り沙汰される昨今、教育現場の先生方には驚きだったのではないのでしょうか。

この日個人的には、正月頃にひいてしまった風邪の影響で、体調不万全のなか、とにかく全力で取り組みました。反省点は多々ありましたが、私達の目指す方向性にブレは無い事を、確信出来た気がします。よりクオリティーの高い舞台を目指して、今年も精進する所存です。

(二) 五年二月十三日



井上 放雲(いのうえ ほううん)

兵庫県生まれ。本名・井上康夫。相愛大学音楽学部卒業。ポーランド留学、国立ワルシャワ・シヨパン音楽院修了。チェリストでもある。日本の舞台芸術理論を学ぶべく、安東伸元に師事。バルト三国・イラン公演に参加。室内楽グループ「アンサンブル「ベンジェ・ドブジェ」」の代表を務め、東西古典文化の間を日々驚嘆の喚声を発しながら往復している。小田・金久君をはじめ学生達にとっては最適の相談役。相愛大学と大阪芸術大学で非常勤演奏要員を勤める。

兵から将へ

小田兆紀

先日、ある狂言会で私は今までにない体験をさせて頂きました。これまで私が演じたり見たりしてきた狂言では、必ずといって良いほど本幕で出て、本幕より引くというものばかりでしたが、その狂言のある役は、本幕から引かずに切戸口より引く、というものでした。アイ狂言以外、いわゆる本狂言で切戸口から引く役があるという事を知らない私にとっては少々驚きであり、そして新鮮味がありました。これは偏に、狂言というものはこうあらねばならないという私の固定観念、視野の狭さ故に発生した事と考えております。

さて、ここで視野絡みでもう一つお話を。ここ最近と云いますか、具体的には丁度一年前からなのですが、狂言を続けていて深く考えさせられる事が多く続きました。その大きな現象の一つは、A&Hホールでの司会でした。それを通じて感じた私に足りないものは、大局的なものの見方といえ良いのでしょうか。

いつまでもなく、司会というものは人の前に立ち、よく熟考した上でものを申し、且つその団体の理念等をお伝えするのが仕事です。当初は具体的にどうしたらよいの

かが全くわからずに時が過ぎていきました。最終的には、諸兄のアドバイスのお陰で何を為せばよいのかが少し見えてきた様な気がしました。とはいえ反省点として、準備不足がまず第一、そして何より勉強不足は否めない事態として残りました。その時は無我夢中で取り組んだつもりでしたが、今から思えばもつとやり様はあったのではないかと思えます。何よりの反省点は、「どうしたら良いか」ではなく、「どうしたいか」というビジョンが殆ど見えていなかったという事でしよう。

よく師匠が「いざこれが必要というその時に準備をしていたのでは遅い、そうなる前に自身に蓄積(つまり準備)そして整理しておかなければならない」と仰います。つまりこれまでの私は、ただただ狂言の修行にのみ傾倒してきただけで、その他の準備が出来ていなかったという事です。それ以外の事はと問われればあまり良い答えを出せない状態でした。いつまでもそれで良いはずがなく、将来展望そして大局的にもを見据えた上でそれに邁進しなければならぬ、そして前述しました「どうしたいか」という問題について考えなければならぬ時期がきたのでしよう。至誠天に通ずるではありませんが、何かを懸命にしていれば、将来演劇だけに関わらず何かの形で今得た事を生かせるのではないかと考えて

が少なからず作用しての思考形態だったのでしょうか。悪くいえば将来展望を想定しないで唯今を生きていただけだったのかも知れません。将来の事を考えると不安が全くないといえは嘘になります。そして何より、自身がどこまで歯を食いしばれるか、という事もです。しかし私は結論からいいますと、人生で一番色々と挑戦出来る時期である今をこの狂言に突っ込んでみたいと思っています。まだまだはつきりと「どうしたいか」が見えているわけではありませんが、一つ覚悟を決めた事によつて本当の靄の中であつた現状が、少なからず晴れてきたよ

うな気がします。師匠が常に仰られます。「大和座狂言事務所は人間形成の塾である。」私はこの大和座という団体がなければもつと遅くに、否、もしかするとそれに気付かないまま一生を終えていたのかもしれない。それは、舞台活動に限らず全ての生活においても同様です。幸いにも、それに気付いた以上、私はそれを考えていかなければなりません。しかしそこには些かの後悔もありません。明日すぐに答えが出るという甘いものではない事も承知の上です。これから先、長い人生において不安や障害と戦い続ける事になるのは必至です。気付いた今よりその思いを止めず、先を見つめていきたいと思っています。感性の受け口を開放すれば、大

和座狂言事務所に入入りする方達は、興味を覚えさせられる様な方ばかりです。芸の事だけに限らず、人生の大先輩がたくさんいらつしやるこの大和座狂言事務所に出会えた事を感謝し、そして今まで以上にたくさんの良い意味での恥をかき人間として成長していきたい、それはきつと将来の糧に繋がると思っています。青臭い理念ばかり述べてしまいましたが、これを本年の所信表明とさせて頂きたいと思えます。皆様、今後ともご指導ご教授の程、よろしくお願い致します。最後になりましたが、本年もどうぞよろしくお願い致します。本日はお運び頂きまして有難う御座いました。



小田 兆紀(おだ ちようき)

一九七八年和歌山県新宮市生まれ。本名・小田政明。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義において安東の薫陶を受け、以来稽古に通い研鑽を積む。大和座装束部・小道具部のエキスパートとしての才能を開花させ、意外性から女性の好感を集めている。昨年のイラン公演旅行が開眼脱皮の体験をもたらせた。橋本市の『市民狂言を楽しむ会』講師。

「余人に代え難い」

金久蒼汲

一月二十三日、堺能楽会館にて大阪芸術大学舞台芸術学科学外公演「狂言之会」が催されました。この催しは安東先生が一九八〇年に同大学に出講されるようになってから二十五年間、一度も欠かすことなく行われてきました。また学外公演とは言いながら、大学や学科が全面的に援助するわけではなく、会館との打合せや装束の手配、学生の指導や連絡など殆どの雑務を、先生はたった一人でこなされてきました。単純に計算して実に千五百人も学生に狂言を教え、実際に装束を着け、舞台上演じさせてこられたこととなります。本来私たちが日本人の根幹であるはずの「古典」の「古」すら知らない若者たちに古典の必要性を説き、日本人の古典に対する誤った認識を説き、一から狂言を教え演じさせてこられた先生のご尽力は、私たちには想像も及ばぬ大変なものであったに違いありません。その四半世紀に及んだ「狂言之会」も、この三月で先生が定年退職されるのに伴い、この度をもってめでたく終焉を迎えることになりました。

舞台芸術学科に入学してくる学生は、当時の私も含め、残念ながらこれまで狂言や

その他古典伝統的なものに一度も触れていない、もしくは高校の芸術鑑賞会などで観たことはあるが、ただ観させられたという認識が強く大して印象に残っていないという者がほとんどです。欧米を真似た上辺だけの近代合理主義の中で育ってきた我々には仕方のないことなのでしょう。そんな彼らがこれまで目にしてきた演劇とは、

「台詞は速く活舌良く」「歌は譜面通り」

「動きは止まることなくリアルに大袈裟に」

大雑把に言つとこんなところでしょうか。また舞台上には音響や照明、舞台美術といった場面説明の手助けをしてくれるものがあります。観客にとつては観ているだけで状況を把握でき、考えることもなく舞台は進行するのですから、作品に対する反応も一定で単純なものになりがちです。それに対し狂言は「台詞は一字一字明瞭に語尾まではつきりと」「謡は決まった音階もリズムもなくその時次第」「動きは必要最低限」また舞台上には何もなく、作品の進行や理解は観客一人一人の創造に委ねられ、作品に対する反応もより一層深まるものと考えられます。一見すると非効率ですが、長年月をかけて無駄を削ぎ落とし必要を研ぎ澄ませた日本の古典を活かすことこそ、実は最も効率的であると思います。明治以降の日本の新劇が、欧米を土台にしたものではなく、日本の能狂言を土台にしていたなら、

現代の演劇はもつと興味深いものになってきたに違いありません。

演劇を志す学生にとつて安東先生に狂言を教えていただくことは、本当に有難いことです。舞台上での立ち居振る舞いや台詞のテンポや強弱などの演技上の技術の向上はもちろん、実際に古典を体験し自分のものにした学生の中には、日常生活においても自分の意志ではつきり発言や行動ができるようになる者も出てきます。また最も感謝すべきは、私も含めこれまで彼らが考えもしなかった日本の問題点に気付かせていただいたことです。私達は自国の文化の根幹である古典を蔑ろにし、その土台を持たぬまま欧米の文化を模倣したなんとも不安定な社会に生き、その上のさらに不安定な演劇という世界を目指すことの厳しさというものを教えていただいたように思います。

私がまだ学生の頃、安東先生は授業でこんなことを仰いました。「舞台というものは演ずる者の思想情念を伴った人間的資質が試される場であり、その善し悪しが観客の心を揺り動かす芸術行為である。」「何も考えなくても何も学ばなくても、何となく生きて生活できてしまふ今の世の中にあつて、確固たる信念を持って行動する方が稀有なのかも知れませんが、メッセージを持つて表現の場へ昇華できなければ、役者を志す意味はないと思います。一月二十三日の

「狂言之会」は最後の会という気持ちもあつてか、緊張して震える者、舞い上がって台詞を飛ばす者、変な汗を掻く者、実にいろいろな表情をしながら、それでも彼らは今までにない大奮闘で、二十五年の歴史を見事に締めくくってくれました。実際に装束を着け、能舞台で狂言を演じたという経験は、今の私がそうであるように、何かの形で必ず彼らを助けたいと思えます。卒業してさらに演劇を志すのであれば、それが役者としての力になってくれることを一先輩として切に願います。

「狂言之会」の数日後、稽古場へある電話が掛かってきました。電話の主は舞台芸術学科の学科長でした。内容は、安東先生の後を担える程の人材が見つからず、また理論と実践の両方を兼ね備えた先生の指導力は「余人に代え難い」ということで、ひとまず残任していただき今少しお力添えを願いたいというものでした。先生もこれを承諾され、来年度も出講されることになりました。



金久蒼汲（かねひさそつきゆう）
一九七八年広島県呉市生まれ。本名・金久寛章。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義において安東の薫陶を受け、以来稽古に通い研鑽を重ねている。演劇人としての肉体訓練の重要さを自覚して精進、これは古典芸能の世界にあつて特異な存在になるかもしれない。昨年のイラン公演で処女海外旅行を果たす。

大阪芸術大学舞台芸術学科 狂言レビュー

原 斗轟

2005年1月23日、私の母校の大阪芸術大学舞台芸術学科による《狂言レビュー》が開催されました。

この《狂言レビュー》は安東先生の講義「古典芸能」を履修した1回生と2回生、そしてこの講義を履修してまもなく狂言をしたいという希望者が発表できる場として一年に一回、1年間の講義の成果として行われてきました。私も学生時代の4年間参加させて頂きました。現代演劇を主に学んでいる学生にとって狂言装束を着けて能舞台に立つことはなかなか出来る経験ではなく、日本古来の芸能を体感し勉強できる唯一の場でした。

さて、私にとつては五回目、卒業してからは初めての《狂言レビュー》ですが、今回初めて装束の着付けをする機会を頂きました。今回のレビューは一日の催しで十八番の狂言が上演されたのですが、装束を着ける学生は42人、その全員の着付けを大和座スタッフが総動員して行います。今回は私もスタッフの一人という気持ちで着付けに挑戦しました。学生時代より師匠・先輩方の装束の着付けを行う姿を何度とな

く見てはいたので「手順さえ知っていれば自分でも出来るのではないか」と思い込んでいたのですが現実はその甘くはなく、なかなか上手くいきませんでした。例をあげますと、「襟は3回折る」という事は知っていてもその「具合」が分からず何度もやり直し、辛うじて完成はするものの、見栄えが悪く、結果としてやり直す、の繰り返しといったものでした。その時は装束を着付けることで精一杯で忘れていたので、安東先生が「装束の着付けは美的センスが重要」と仰っていたことを思い出しました。もちろんこの「美的センス」には確かな技術と経験がなければ具体的に表現することが出来ないに違いないのですが、とても大切な事のように思います。装束を着付けている時に少しでも「美的センス」を働かせていれば何か違っていたかもしれないという反省と、これからの課題を発見したように思います。

今回、私は狂言に出演する機会も頂いていました。といいますのは現4回生の学生の相方を勤めることになったからです。彼にとつては学生時代最後の晴れ舞台で、最年長としての使命感と緊張感で一杯だったに違いありません。私自身、昨年の《狂言レビュー》で狂言をさせて頂いた時も同じ境遇で、その時一緒に舞台上がって頂いた方が、同大学の卒業生である、小田・

金久両先輩でした。未熟な自分をぐいぐいと引つ張って下さる先輩方の姿に憧れ、その頼もしさは鮮明に覚えています。私は今回そんな先輩に成るべく4回生の彼との狂言に望みました。そして舞台を無事に終えた今、狂言を通じて彼に何かが残れば、少しでも先輩方に近づいたのではないかと思います。

大学を卒業して以来はじめての《狂言レビュー》、私にとって良い経験になりました。私に出来ることはまだまだ少ないですが、学生時代とは違う心構えで望めた事、そして、装束の着付け、後輩との狂言で感じた事は、新たな一步を確実に踏み出した事になったのではないかと思います。



原斗轟(はらとうこう)

本名・原裕之。二〇〇四年大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。在学中、学外公演「狂言レビュー」で四回の狂言出演を果たす。卒業後も関西に留まり、先輩を習って大和座への参入を決意。芸名に負けていると専ら論評(本人は猛反発中)。

大和座狂言事務所関連 催しのお知らせ(公演場所)

二月

二十六日(土)午後二時 秋篠音楽堂

声の競演「狂言師VSオペラ歌手」

オペラ「昔噺 人買太郎兵衛」

青木耕平・町田百々子・板倉計夫・

大谷正和ほか

狂言「磁石」

安東伸元・小田兆紀・金久蒼汲

【お問い合わせ】〇七四二 三五 八一六一

二十七日(日)午後二時

ECCアーティストカレッジ7階

第二回「ECC狂言の会」

【お問い合わせ】〇二二〇 九八八 〇六二

【入場料】一五〇〇円

三月

五日(土)午後一時 堺能楽会館

第八十二回/市民なんでも講座「狂言」

「チヨ口&能舞」「話と演習」「鶏婿」

安東伸元ほか大和座狂言事務所

【お問い合わせ】〇七二 一三五 〇三〇五

【入場料】二五〇〇円(当日/二〇〇〇円)

八日(火)午後六時 千里山教室

輪読会「松風を読む」

【お問い合わせ】大和座狂言事務所

【会費】五〇〇円

十八日(金)午後七時 若江岩田くすのきプラザ

「くすのきカレッジ古典芸能学科」

【お問い合わせ】〇七二九 六七 六五六五

二十一日(月)午後一時 神戸港埠頭

日本国練習艦隊「文化講演会」講話と狂言

会場/練習艦「鹿島」講堂

四月

一五日(金)午後二時 千里中央「A&Hホール」

「古典芸能と出会ったとき」

「凛とした日本語」

狂言「呼び声」・「講話と歌唱演習」ほか

【お問い合わせ】〇六 六八七三 二六〇七

【料金】会員/二二〇〇円

会員/一五〇〇円

編集後記

皆さまはメッセージジャーというものをご存じですか？インターネットさえ繋がってあれば、世界のどこにいてもインターネット上で相手とお話ができる便利なシステムのことです。

相手とインターネット上で、文字で会話をすることを「チャット」といい、このメッセージジャーもチャットの一つです。

私も海外にいる間、随分このメッセージジャーのお世話になりました。約十ヶ月間、文章を書くといえば便利で手軽なメールがメッセージジャー。ついつい簡略化した話し言葉でしか文章を書いていかなかった私が、再び大和座通信の編集をする事になり、相手を想定したメッセージ性の強い文章を久しぶりに目の当たりにして、目を覚まされた感覚を覚えました。約十ヶ月間ですが、日本語から離れていた事で私の日本語感覚も少なからず鈍っているのかも知れません。

メールやメッセージジャーなどの便利さを否定するわけではありませんが、それだけに偏ってしまうのは、ワープロを使うようになって漢字が書けなくなったり、携帯電話を使うようになって電話番号を覚えなくなったりしているのと同じように、便利さと引き替えに日本語が本来持っていた力強さや美しさ、そしてメッセージ性等を失って

くということだなと思われた次第です。

大和座狂言事務所は今年も引き続き、日本語が本来持っている美しさや力強さをテーマに、A&Hホールにてシリーズ公演を展開してまいります。便利さや手軽さと引き替えに失いつつある日本語の本来の美しさや力強さを、皆さまと共に見つめ直すそんな催しを目指していきたいと思えます。本年度もどうぞよろしくお願い致します。

秀

発行 日二〇〇五年二月十八日
発行責任者 許 秀美

大和座狂言事務所

代表 安東伸元

千五六五〇八四一

吹田市千里山東二丁目3の3

06(6384)5016

fax 06(6384)0870

http://homepage3.nifty.com/yamatoza
e-mail: BYX04535@nifty.ne.jp